



今回は、社会連携セミナー第1回「さくら塾」についての報告です。

◇ 7月18日 第1回「さくら塾」 中部大学創発学術院准教授 松田一希先生

ボルネオ島に生息するテナグザル。その不思議な生態について、長年フィールドワークを行っている松田一希先生からお話をうかがいました。さらに、パームヤシ農園の増加などが原因で、ボルネオ島の熱帯雨林が危機に瀕していることについても学びました。霊長類学や熱帯雨林の環境問題に関心のある参加者17名は、熱心にメモをとり先生のお話に聞き入っていました。

「新発見は意外と身近なところにある」。松田先生の一言が生徒たちの心をとらえたようです。

<生徒の感想>

今回、松田一希先生の公演を聞いて、大きくふたつの感想を持ちました。

ひとつ目は、テナグザルという一生物の特殊性に驚いたという感想です。特にテナグザルが霊長類であるにも関わらずウシやシカなどと同じ様な反芻動物であることと、その鼻が大きいほどメスを引きつけるという特徴に驚きました。また、鼻が大きいほど、モテるということに、鼻が大きいほど力が強く、繁殖力があるという裏付けがあることに、テナグザルという動物の神秘を感じました。



ふたつ目は、パームヤシのプランテーションによって、テナグザルといった、森林に生息する動物たちが危険にさらされているという事実を改めて痛感させられたという感想です。公演の中で、アブラヤシを育てている面積の6分の1が、生産性のない、ただ動物たちの生活を苦しめるだけの土地になってしまっていることを聞きました。そして、このままではいけないことを知っていながらも、行動に移すことは簡単ではないということも知りました。

しかし、このまま放っておいてよいはずがないことも事実であり、それを訴え、解決策を導くのが僕たちの SGH のテーマなので、どうしたら現地の人々や世界中の人々に納得してもらえるか、行動に移せない原因は何なのかといったところを細かく分析し、発表ができるようにしたいと思いました。そのために、松田先生のおっしゃった「パワーエコロジー」をしっかりと意識し、夏休みの課題研究に取り組みたいです。 写真：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

